

「肝 障 害」

—アルコール・薬物障害例とその病像—

千葉大学講師

伊 藤 進 著

東京女子医科大学教授

三 葉 病 院 院 長

名 尾 良 憲

近年、飲酒者ならびに飲酒量の増加に伴いアルコール性肝障害例に接する機会が多くなったが、また新薬開発の進展によって薬剤性肝障害も増加しつつある。このときにあって伊藤進博士が「肝障害—アルコール・薬物障害例とその病像」なる著書を刊行されたことは、誠に時宜をえたものと思う。著者は、本邦に肝生検法が導入された当初から、これによる肝組織像の研究に取り組んでこられ、多くの業績を発表されつつある篤学の士である。

肝疾患の診断の項においては、問診、触診などの診断法に始まり、臨床所見からみた鑑別診断、さらに肝機能検査、生検法から電顕像にいたるまで、初心者にも、きわめて理解しやすく解説されており、これによってまず肝疾患全体の診断法を十分に把握することができる。

アルコール性肝障害の項においては、まず症例をあげて解説し、次の

で臨床病理学的考察、診断、治療を記述し、とくに脂肪肝、アルコール性肝炎、肝硬変などの相互関係、移行の問題ならびに非アルコール性肝障害との鑑別点について述べてあるが、これは臨床上に非常に役に立つ。

薬物性肝障害の項でも同様で、最初に症例をあげ、次いで臨床像、生検像、臨床病理学的考察を述べ、さらにウイルス性肝炎との鑑別について記述してある。

なおアルコール性肝障害の項では、アルコール代謝と肝、薬物性肝障害の項では肝における薬物代謝を詳細に解説されたことは、これらの肝障害の考察を、病理組織学的な面と病態生理学的な面とを結びあわせた点において、きわめて有意義である。

著者のもっとも得意とされる肝生検像（光顕と電顕）を駆使して、現在まで不明であった幾多の問題、た

とえばアルコール硝子体などについて解明されたことは喜ばしい。また最後に、鑑別を要する疾患の項が設けられている。ここでは慢性肝炎の症例をあげ、さらに肝炎の慢性化の問題、類縁疾患との鑑別、さらに原発性胆汁性肝硬変についても詳述してある。

本書は、アルコール性肝障害、薬物性肝障害を中心として、肝疾患全般にわたり解説されたものということができる。そして症例から出発して、病理組織学的所見を呈示して、さらに病態生理学的観点にたつて、臨床像をふりかえるという形になっている。著者が序において述べているように、細胞レベルでえた知見を臨床に還元しようとする努力のほどがうかがわれる。

光顕とか電顕というと、実地医家にとってはなじめないかも知れないが、これらの所見を基礎として、臨床像の解明がなされるわけであるから、本書を読むことによって、肝疾患の臨床診断の考え方が明確になり、これを日常の臨床に応用することができる。

本書は実地臨床医家の肝疾患に対する日常の診療に役立つとともに、消化器疾患、肝疾患を専門とする方、あるいはこれを志す者の必読の書ということができる。

B 5 頁 304 図 94 写真 129 原色図 5
¥ 9,600 〒 280 医学書院 刊